

5月上旬

ジャガイモの手入れ（管理）

2月末から3月に植え付けたジャガイモが大きく育ってきていることと思います。しかし、植え付けただけでは大きなジャガイモは収穫できません。しっかりと手入れ（管理）をしなければなりません。



芽かき

たくさんの芽が伸びてくるので、草丈が10 cmぐらいになったら、勢いのよいものを2本残しほかはすべて取ります。種イモを引き抜かないように株元をしっかりと押さえながら、斜め方向に抜き取ります。抜き取りにくいときはハサミで切り取ります。これを芽かきといいます。芽かきをしないと葉が茂りすぎてジャガイモができません。



追肥・土寄せ

芽かきが終わったころ、株元に1回目の追肥をします。追肥は野菜専用化成などを1㎡当たり30 g程施します。

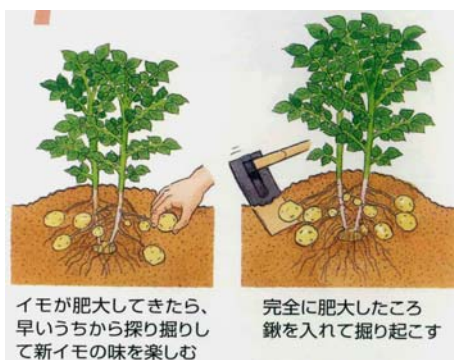
その後15日～20日後に、2回目の追肥をします。（1回目と同量）

追肥に合わせて、通路の土を株元へ4～5 cm以上の厚さになるように土寄せをします。

ジャガイモは、種イモの上に伸びた根茎の先端が太ってイモになるので、土寄せは少ないとジャガイモができるのが少なく、また、イモが露出して緑化してしまいます。（緑色のジャガイモは食べると体によくありません）



収穫・貯蔵



イモが肥大してきたら、早いうちから探り掘りして新イモの味を楽しむ

完全に肥大したころ 鍬を入れて掘り起こす



積み上げると腐りやすい。とくに湿地のものはすぐに腐るので要注意



晴天続きのときを選んで掘りあげ、表面を日陰で乾かしてから薄く並べて蓄える

5月中旬

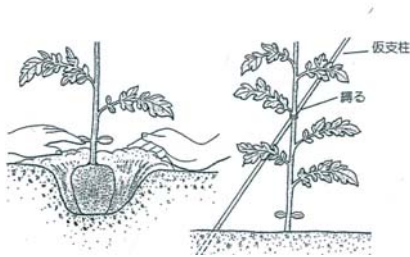
トマトの定植と管理

トマトは同じ場所で続けて作っていると、青枯病にかかって枯れてしまうので、トマト、ナス、ピーマンなどナス科作物を作ったところは、5年以上間隔をあけてから作ります。

定植直後にチッソ肥料を施しすぎると、乱形果、すじ腐病、異常茎、落果など生理障害がひどくなることがあります。

石灰が不足すると尻腐れ病（花落の部分黒く凹んで腐ってしまう病気）にかかるので、元肥使用時に石灰を施します。

定植



苗の本葉が8枚前後になり、第1花房の花が膨らんで開花が間近になってきたら、暖かい日を選んで午前中に定植します。

株間は35～40cmの間隔で1条又は2条植えとします。植える前に植え穴に十分水をやり、深植えにならないように、また、株元が凹むような植え方はよくない。徒長苗は寝かすように植え付け、茎と土が接する部分から発根させるとよい。さらに、十分水をやっておくと萎れが少なく活着しやすい。

植え方は、第1花房が谷側に向くように揃えて植えると、ほかの花房も同じ方向に出てくるので収穫作業がしやすい。

追肥

第1回目は、第1花房の果実がピンポン球程度の大きさになった頃。

第2回目は、第3花房の果実がピンポン球程度の大きさになった頃。

第3回目は、第5花房の果実がピンポン球程度の大きさになった頃。

それぞれ、株間に野菜専用化成など40～50g/m²施用します。肥料が効きすぎると茎葉が茂りすぎて果実の生育が悪くなるので、生育を見ながら加減します。

整枝・枝の誘引および摘果

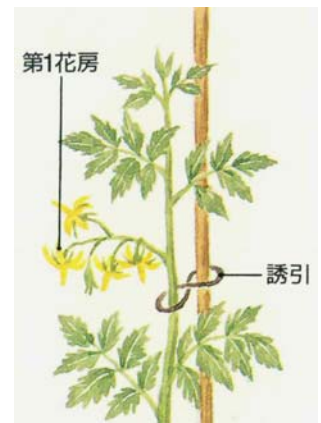
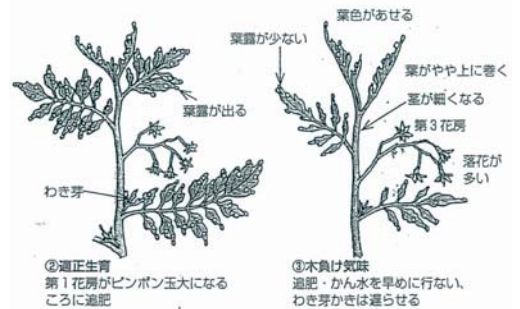
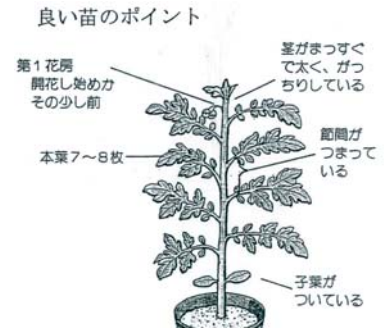
整枝はトマトの生育をよくするだけでなく、病害虫の発生を少なくするためにも大切な作業です。

各節に出るわき芽は小さいうちに摘み取り、1本仕立てとして主幹の生長を促します。

5～6段の果実（房）を収穫目標とし、最上段の花房の上の葉2枚を残して摘心します。

誘引は株ごとに20～30cm間隔程度に人差し指が入る程度の余裕をもって、∞の字型に結びます。

1つの花房にたくさん着果したときは、ピンポン球大の頃、形のよいもの4～5個残して他は摘み取ります。



5月下旬

サツマイモの植え付け

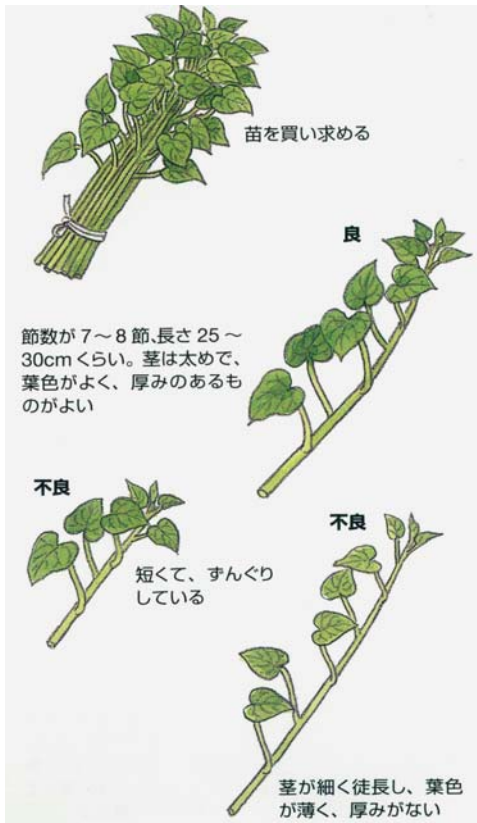
サツマイモは、やせた土地でもよく育ちます。栽培時期は、5月中旬～6月中旬に植え付け、10月から11月にかけて収穫します。

チッソ肥料が多すぎるとつるぼけするので、肥沃な土地では元肥はいりません。

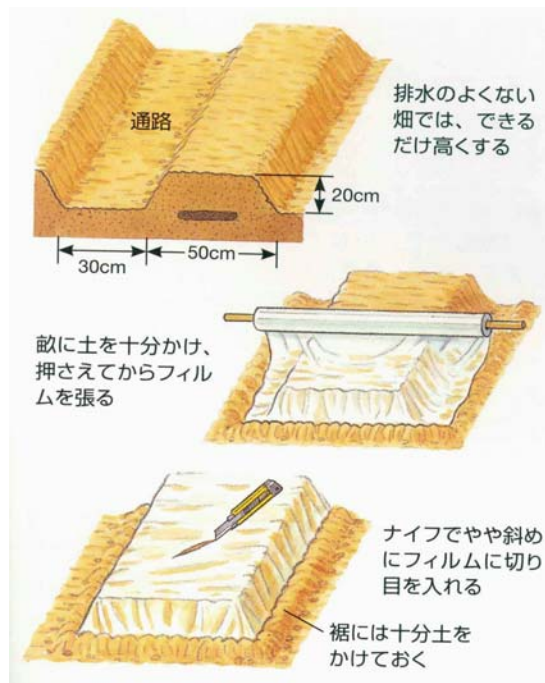
品種は、イモの太りが早く味もよいベニアズマや、高系14号、鳴門金時、橙色のベニハヤト、紫色のアヤマラサキなどがあります。

苗の準備

苗は節の間が詰まり気味で、茎も太く、葉柄も短いものがよい。



畝づくり・マルチング



植え付け

